

明治村の生みの親 谷口吉郎



博物館明治村の創設に大きな役割を果たした建築家の谷口吉郎（1904–79）は、金沢の九谷焼の窯元の家に生まれました。頭脳明晰で文才もあり、处女作の「東京工業大学水力実験室（1932）」は、当時ヨーロッパで最先端だったモダンデザインをいち早く取り入れた名作として知られています。

また文化全般に造詣が深く、文化勲章の選定委員だったこともあり、それらで得た人脈が、後に明治村の構想を後押ししました。

「明治村」という名称も谷口の提唱によるもので、建物の配置計画についても、谷口と建築委員会の担当者が相談して決めました。当初は敷地が狭かったこともあり、良い場所は担当者同士で取り合いになりましたが、聖ヨハネ教会堂に関しては外から目立つ場所だったこともあり、すんなり決まったそうです。ちなみに、明治村2丁目の東山梨郡役所に向かう街並みや「レンガ通り」の名称も、谷口のアイデアです。

明治村ができた昭和40年代には、谷口は愛知県に頻繁に訪れていて、その間に「名古屋大学古川図書館（現名古屋大学古川記念館）（1964）」、「名鉄バスター・ミナル（1967）」、「料亭河文水鏡の間（1973）」、「愛知県陶磁資料館（現愛知県陶磁美術館）（1978）」などの建物を手がけています。

洋風建築

地中海を中心に広くヨーロッパ圏で発達した建築を「西洋建築」という。

また、の中でもアカデミックな機関で研究されたり、

過去の歴史や地域性を取り入れて確立されたデザインを「様式建築」という。

それら西洋建築の影響を受けた「洋風建築」が、幕末以降の日本を彩った。



photo: Akihiko Mizuno



明るい会堂。みつば形アーチの小屋組も隅々まで見える

たデザインは、自由で軽やかな雰囲気を感じさせますが、聖ヨハネ教会堂にもそんな気分が漂っています。

設計を担当したガーディナーは、ハーバード大学で建築を学んだのちに立教大学の校長になるために来日し、以後45年に渡って宣教師や教育者、建築家として活躍しました。立教大学の校舎をはじめ、全国に教会や学校などの建物を手掛けましたが、今ではその多くが失われています。

復原された姿

ところでの聖ヨハネ教会堂は、度重なる改修と自然災害による老朽化でボロボロの状態でした。しかし、この教会堂は、改修によって元の姿を取り戻すことができました。改修によって、木造の屋根裏が復元され、天井が張り巡らされ、窓枠がステンドグラスで飾られています。また、内装も改修によって元の木造の内装に戻されました。改修によって、元の木造の内装が復元され、天井が張り巡らされ、窓枠がステンドグラスで飾られています。また、内装も改修によって元の木造の内装に戻されました。

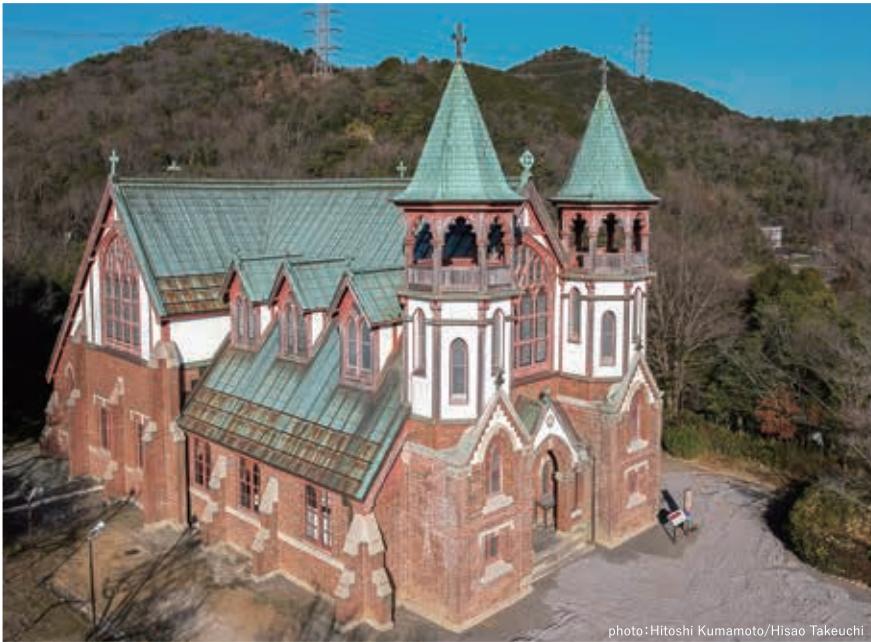
明るい会堂

双塔の間のレンガで形成された尖頭アーチをくぐると、1階には日曜学校や幼稚園に使われた部屋があります。そして、塔の中の白い階段室を上ると、大きな屋根裏空間のような会堂が広がります。

会堂は十字形の平面となっていて、正面と袖廊に4連トレー・サリー（窓枠）の大窓があり、側廊には屋根窓が並んでいます。窓にはステンドグラスがあしらわれ、ほんのりと色が混じった清らかな光が堂内を満たしています。

また、小屋組にはみつば形のアーチが架かり、天井に張り巡らされた竹の簾と艶のある床面が光を反射して、空間をより明るく開放的に感じさせます。聖ヨハネ教会堂が丘の上に復原されたことは、採光の点からも幸運だったと思います。

ところでの聖ヨハネ教会堂は、度重なる改修と自然災害による老朽化でボロボロの状態でした。しかし、この教会堂は、改修によって元の姿を取り戻すことができました。改修によって、木造の屋根裏が復元され、天井が張り巡らされ、窓枠がステンドグラスで飾られています。また、内装も改修によって元の木造の内装に戻されました。改修によって、元の木造の内装が復元され、天井が張り巡らされ、窓枠がステンドグラスで飾られています。また、内装も改修によって元の木造の内装に戻されました。



賑やかな外観。正面の双塔や、2階の十字形平面の三方に開く大窓、側廊の屋根窓など、遠目からでもよく目立つ

聖ヨハネ教会堂

清らかな光に溢れる、明治村のランドマーク的な教会堂

ノスタルジックなランドマーク

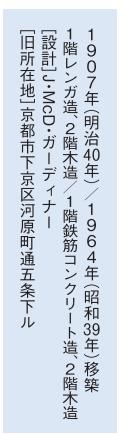
小牧側から入鹿池へ通じるのどかな道を進むと、小山の中腹に双塔のある赤いレンガ壁と緑青色の屋根の建物が見えてきます。ノスタルジックな佇まいを遠目に見つけると、いよいよ明治村に近づいた感じがして胸が高鳴ります。聖ヨハネ教会堂は、そんな明治村のランドマークのような建物です。



レンガで構成された尖頭アーチの玄関

京都市電沿いの教会堂

聖ヨハネ教会堂は、京都の街中にプロテスrant系の教会堂として建てられました。移築前は路面電車の走る沿線にファサードが迫っていて、華やかな姿が街並みを彩っていました。特徴的な外観は、中世ヨーロッパに端を発するロマネスク様式を彷彿とさせます。西洋建築史の中で様式Ⅱスタイルとして確立され



オルガンを美しく照らすステンドグラスの光

1907年(明治40年)／1964年(昭和39年)移築
1階レンガ造、2階木造／1階鉄筋コンクリート造、2階木造
【設計】McD.ガーディナー
【旧所在地】京都市下京区河原町通五条下ル



photo:Akihiko Mizuno/Hisao Takeuchi

西郷従道邸

名実ともに明治時代を代表する、瀟洒な洋館

エレガントな洋館

明治村の中でもっとも有名な洋館といえば西郷従道邸でしょう。芝の前庭に張り出したベランダにはレースのよだれ軒飾りや装飾のある手摺りが付き、優雅な姿を見せています。また、傍らに植わるシュロがベランダの柱と連続して見え、異国のような情緒を感じさせてくれます。

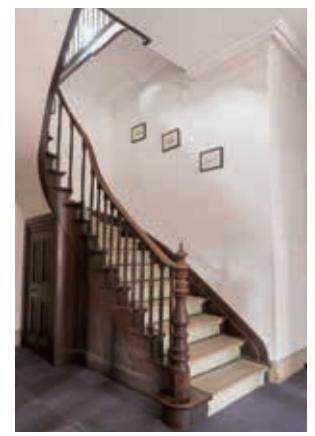
明治初期には、このようなベランダのついた建物が数多く建てられ、南方の植民地を経由して入ってきたことから「ベランダコロニアアル様式」と呼ばれています。

偉人の邸宅

この邸宅の主人の西郷従道は、西郷隆盛の実弟で、陸海軍や内務省の大臣を歴任した明治政府の要人です。また海外視察の経験もして入ってきたことから「ベランダコロニアアル様式」と呼ばれています。

この邸宅の主人の西郷従道は、西郷隆盛の実弟で、陸海軍や内務省の大臣を歴任した明治政府の要人です。また海外視察の経験もして入ってきたことから「ベランダコロニアアル様式」と呼ばれています。

この邸宅の主人の西郷従道は、西郷隆盛の実弟で、陸海軍や内務省の大臣を歴任した明治政府の要人です。また海外視察の経験もして入ってきたことから「ベランダコロニアアル様式」と呼ばれています。



漆喰の艶かしい曲線が美しい階段



1階書斎。窓から入る光が室内を彩る

豊富で、西欧の制度の導入に尽力し、外交官

や国内外の客を招くために、約2万m²の広大な敷地にこの洋館を建てたといいます。明治22年には明治天皇も訪れ、ベランダから相撲を見たと伝わっています。

戦後になると広大な敷地は国鉄が所有し、洋館は構内の隅へ移されてしまいましたが、明治村建築委員会の働きかけで移築されました。

お雇い外国人レスカス

西郷従道邸の設計は、フランス人のレスカスが担当したといわれています。レスカスは鉱山や地盤調査のお雇技師として働いたのちに、神戸と横浜で建築設計事務所を開設しました。

また、日本建築の耐震性を研究し、重い瓦がのる欠点やレンガ壁に帶鉄を入れて補強することなどを論文にまとめて、フランスの土木学会誌に発表しています。

西郷従道邸には耐震性に留意した工夫が施されていて、例えば屋根は軽量化のために垂木を抜いて洋小屋（トラス）に銅板をのせ、また外壁の間には1mくらいの高さにレンガを積んで建物の浮き上がりを抑えています。

そんな構造的な工夫が、軽やかでエレガントな佇まいに一役買っているのです。

インテリアの美

もうひとつ、忘れてならないのがインテリアの美しさです。鹿鳴館で使用された桜蒔絵小椅子などが置かれ、明治時代の迎賓施設の雰囲気をかもし出しています。またカーテンの中廊下を軸に配置された各部屋では、時間によって窓から入る光が変化することで、美しい瞬間が生み出されています。



鹿鳴館で使用された桜蒔絵小椅子

1880年(明治13年)／1964年(昭和39年)移築
木造2階建
「設計」J・レスカス
「旧所在地」東京都目黒区上目黒



ドイツ・バロック様式を抽象化したシンプルな外観

必死の消火活動で類焼を免れたという逸話も残されています。

ドイツ風デザインの混在

2丁目のレンガ通りからは、少しほそに構えた北里研究所本館の尖塔がよく見えます。塔の高さは20m以上あり、背の高い屋根の上

から空へ伸びる姿がひときわ目をひきます。建物に近づくと萌黄色の下見板が水平に広がり、土台のレンガと軒下の漆喰、天然スレートのマンサード屋根の取り合わせが、清廉で品のある佇まいを感じさせます。また壁面を構成する付柱と付梁の意匠は、ドイツ・バロック様式風の外観をかたちづくっています。

一方で、正面の上部にある階段状の妻飾りや、車寄せの柱、玄関の木製扉には、当時ヨーロッパで流行していたアールデコやゼツエッシュヨンなどの新しいデザインの影響が感じられ、モダンな印象も漂わせています。

研究室と展示空間

かつての北里研究所本館・医学館は南を向き、「L字型」の平面をしていました。明治村へは左翼の突き出た部分を除いて移築され、建物は南北を向いています。スケールの大きな諸室には窓が多くあけられ、特に以前北側だった部屋は、実験や研究のために安定した光を取り込めるよう配慮されています。

現在、建物内では顕微鏡などが展示され、北里柴三郎を始め、研究者たちの業績を包括的に知ることができます。このような展示を通じて明治時代の偉業を学ぶことができる



1階展示室の顕微鏡

1915年(大正4年)／1980年(昭和55年)移築
木造2階建で
「旧所在地」東京都港区白金



感動的な屋根裏空間。屋根の中央には塔が載るため、より複雑な木組みとなっている。窓からの光が美しい(通常非公開)

photo:Hitoshi Kumamoto/Akihiko Mizuno

北里研究所本館・医学館

清廉なデザインが美しい、ドイツ・バロック風の洋館

日本医学界の記念碑

明治になって以降、日本は西洋の文明を移入して飛躍的な発展を遂げました。あらゆるジャンルに及んだ変革の中でも、とりわけ医学は成果を上げ、「日本近代医学の父」と呼ばれた北里柴三郎は、細菌学の研究で世界的な業績を残しました。破傷風菌の純粹培養や血清療法の確立は、ペスト菌の発見とともに、人類の歴史にその名を刻む重要な仕事だったといえるでしょう。

北里研究所本館・医学館は、そんな北里が創設した私立の研究所で、医学界における記念碑的な建物です。関東大震災や太平洋戦争などを乗り越え、空襲の折には研究者たちの



尖塔とマンサード屋根、妻飾りのディテール



渡り廊下も魅力的な空間

神戸居留地と六甲山麓の雑居地
神戸が開港されたのは慶應3年のことで、中国や東南アジアとの貿易を通じて繁栄しました。その一方で、居留地の整備が開港に間に合わず、外国人たちは六甲山麓に向かう田園地帯へ住まいを求めました。

神戸山手西洋人住居のあった山手には、明治20年代くらいから多くの洋館が建てられるようになりました。そこで、旧ハンター邸などの重要文化財もこの時期のものです。昭和30年代後半になって、これらの洋館に取り壊しの話が持ち上がり、旧ハンター邸は近郊の公園に移され、神戸山手西洋人住居は明治村へ移築されることになりました。

渡り廊下の先の和室

ドアを開くと、少し斜めにズレた短い渡り廊下が架かり、その先には開放的な和室が広がっています。和室には大きな床の間や満月を模した窓など凝った意匠が設えられています。

神戸の洋館では主屋と付属屋を組み合わせた建物が典型的となっていて、渡り廊下から付属屋の2階に渡る洋館もわずかに現存しています。おそらくこれは主人と使用人の空間を分けた工夫で、和室は主人の接客空間だった



付属屋2階の和室。満月の窓が風雅

明治20年代／1969年(昭和44年)移築
木造二階建／付属屋付き
「旧所在地」神戸市生田区山本通

神戸居留地と六甲山麓の雑居地

アクロバティックな室内構成

ベランダから建物へ入ると、中心に廊下が通り、片側には2階へ上がる階段があります。廊下の両側には部屋が配置され、大きなフランス窓からベランダへ出られるようになっています。狭い室内ですが、窓のおかげで明るく開放的な空間となっています。また、2階も同じような間取りになっていて、窓の先には入鹿池の眺めが広がっています。

ところで、2階には外に出る不思議なドアがあります。その先は渡り廊下となっていて、洋館の後ろにある付属屋とつながっています。不思議なのは、付属屋の2階へはここを渡らないと辿り着けないのです。

と考えられています。

明治時代の暮らしの変革は、当時の人々にとつて手探りだったことが、このような不思議な構成の住宅からもうかがい知ることができます。



古典主義建築風のベランダ。左右非対称を感じさせない巧みな構成。後ろに見えるのが付属屋



ベランダの柱頭のディテール

神戸山手西洋人住居

ベランダのデザインが美しい、渡り廊下のある洋館

古典主義デザインの妙味

明治村には小ぶりながら不思議な魅力をもつ建築があり、とりわけ神戸山手西洋人住居は、それを巧みな古典主義建築風のデザインで包んだ興味深い建物です。まず外観を前にして目をひくのがベランダです。柱や手すり、大きな窓と水平の装飾帶が秩序のある構成を感じさせますが、よく見るとベランダはL字型に配置され、柱の間隔も不均一です。また角柱の数もコーナーと正面入り口、その合間とで異なっており、全体が左右非対称であることに気づくでしょう。これは古典主義建築のデザインのテクニックで、敷地など状況に恵まれない建物にも優雅さや品格を与える優れた手法です。神戸山手西洋人住居は、このベランダのおかげで美しい姿を獲得しています。



ステンドグラスのディテール

声を上げる子どもたちや、夢中になって写真を撮る若いカップルなど、劇的な空間に魅了された人々が思い思いに建物を楽しんでいます。

京都に白い伽藍があったとき
聖ザビエル天主堂は、聖フランシスコ・ザビエルに捧げられた教会堂で、京都の河原町にパリのカトリック教会の資金で建設されました。それに伴い図面もフランスから送られましたが、土地の事情などから手を加え、寸法も日本の尺度に直されました。それを担ったのは、建築に造詣の深いパピノ神父だったと伝わっています。

白色の大きな外観には石積みのような筋彫りが施され、堅牢な佇まいを見せていますが、この建物の構造は木造とレンガ造になります。外観はイタリアのロマネスク建築を思

わせ、かつては京都の街並みでもひときわ目をひいたことでしょう。また、中央に浮かぶ薔薇窓のステンドグラスも印象的です。以前はこの薔薇窓の窓枠も木製でしたが、現在は金属で復原されています。

魅惑の内部空間

堂内に足を踏み入れると、ステンドグラスの美しい光が目に飛び込んできます。窓の数

以上に光を感じるのは、薔薇窓をはじめ、あらゆる壁面に色とりどりのステンドグラスがはめられているからです。透過した光が室内に映り込むため、いつそうドラマチックに感じられるのです。

垂直に伸び立てる背の高い束柱が立ちます。その束柱が天井まで伸び、隣り合う束柱へとつながっています。また天井の筋はリブといい、交差するリブで構成された天井を交差リブ、ヴォールトといって、ゴシック建築ではとても重要な要素となります。

他にも、身廊をクリアストーリー（高窓）、トリフオリウム、大アーケードの3層に分けたもの、ゴシック建築の特徴で、西洋建築ではこれらデザインを様式化スタイルへ昇華させ



内陣の天井。束柱とリブの構成に注目



photo: Hisao Takeuchi/Hitoshi Kumamoto/Akihiko Mizuno

聖ザビエル天主堂

ゴシック建築の大家が復原に携わった、白亜の教会堂

ゴシック建築の美

ほの暗い堂内に浮かび上がる色とりどりの光に、伸び立てるような上昇感。複雑に絡みあう柱の束が林立する荘厳な空間と、それらを組上げる構造的な工夫。12世紀のフランスで生み出されたゴシック建築は、明治以前の日本には無かった建築美をたたえています。5丁目の小高い丘の上にどつしりと佇む聖ザビエル天主堂には、いつも大勢人が訪れます。ステンドグラスの光に圧倒されて歓



木造とは思えない威容。かつて壁面はレンガ造だった



photo:Akihiko Mizuno/Hisao Takeuchi

内閣文庫

明るく軽やかな外観が美しい、明治末期の古典主義様式の建築

様式建築の習熟

明治の建築の歴史は、西洋の様式建築の移入と習得の歴史とも言い換えられ、それらを形成する様式＝スタイルの習熟は、日本の建築家にとって最も重要な課題でした。内閣文庫は、そんな様式建築の習熟を示す明治末期の建物です。巧みに構成されたファサードは、ルネサンス様式の厳格さを残しつつ軽やかに仕上げられた見事なデザインです。また、政府の中央図書館という用途に従い堅牢性が重視され、デザインを抑えている点も重要なポイントです。

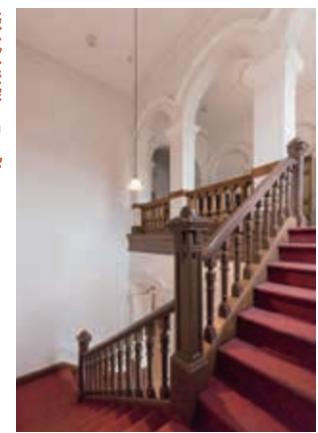
皇居の中の図書館

そもそも内閣文庫は、徳川家ゆかりの貴重な書籍を管理するために、赤坂離宮内に置かれていました。また、事務室や閲覧室などの各部屋の装飾も控えめなため、不思議な親しみやすさを感じます。

内閣文庫は、元は3階建ての書庫が併設してあり、明治村へは本館と事務棟のみが移築されました。また小高い丘から臨む場所に配置されたため、まるでヨーロッパの郊外住宅のような趣ぎがあります。

内閣文庫の外観が明るく軽やかに感じられるのは、そんな印象も影響しているのかも知れません。

内閣文庫の外観が明るく軽やかに感じられるのは、そんな印象も影響しているのかも知れません。



階段の吹き抜け。連続するアーチが楽しい



旧事務室。繊細なミニチュア建築が展示されている



響き合う造形がハーモニーを生む

内閣文庫に始まります。その後、明治政府が集めた古文書や洋書を加え、昭和46年に国立公文書館に移管されるまで利用されました。

明治村へ移築された内閣文庫は、明治が終わる前年に皇居東御苑の大手門近くに建てられました。設計したのは大蔵省臨時建築部の大熊喜邦で、後に国会議事堂建設の指揮をとった人物です。

温厚な人柄で学識も高く、江戸時代の建築の研究にも打ち込んだ大熊は、国会議事堂の計画や関東大震災後の復興事業を担った大蔵省臨時建築部の黄金期を支えた大黒柱でした。

内閣文庫の外観を特徴づけるのは、正面中央のルネサンス様式のモチーフです。ドリス式オーダーが三角形のペディメントを支えるデザインや、1階と2階、屋上階を3層に分ける構成は、ギリシア・ローマ建築に端を発する古典主義建築の典型的なかたちです。

よく見ると、ドリス式の半円柱のつなぎ目は、両脇の角柱や背後の石積み風の筋彫りとつながり、全体の造形が関係し合うように配慮されています。また柱の上のフリーズ（水平の装飾帯）にあるリズミカルな装飾の配置も柱に合わせて調節されていて、響き合う造形が全体の構成を整えています。

逆に、中央部分以外はシンプルに抑えられ、2階の壁面はタイル張りにすることで、より軽やかな印象を与えています。このような柔軟な発想は、ひとえに様式の理解と習熟を物語っています。

館内に足を踏み入れると、少し違和感を感じます。

透明な空間

1911年(明治44年)／1990年(平成2年)移築
レンガ造／石造／鉄筋コンクリート造／一部石造
【設計】大熊喜邦
【旧所在地】東京都千代田区千代田



それ以外の洋風建築1 学校

明治村には様式建築の他にも素晴らしい洋風建築が移築されています。

それらの建物は、いずれも新しい時代をあらわすシンボルでした。

ここではそんな建物を「学校、病院、監獄、灯台」に分けて紹介します。



photo:Akihiko Mizuno/Hitoshi Kumamoto

三重県尋常師範学校・蔵持小学校。正面玄関のアーケードのような空間に、レース状の装飾の影が落ちる様子はとても優雅

三重県尋常師範学校・蔵持小学校

明治政府にとって、西洋にならった近代的な教育制度の整備は急務の課題でした。それは明治5年に発布された「学制」からもうかがうことができます。

三重県尋常師範学校は、小学校教師の学校として建てられ、その後移築されて蔵持小学校に転用されました。設計者の清水義八は三重県庁舎を手がけた大工出身の建築家で、破風やベランダに洋風のデザインがあしらわれています。

見どころは正面玄関で、トスカーナ式の柱の途中に架かる扁平なアーチから装飾が垂れ下がり、奥に見える廊下と合わせて、ヨーロッパのアーケードのような雰囲気をかもし出しています。

第四高等学校物理化学教室

2丁目のレンガ通りに面した第4高等学校物理化学教室は、とりわけ興味深い建物です。当時、物理や化学は花形



第四高等学校物理化学教室の外観



第四高等学校物理化学教室の階段教室

ともいうべき学問でした。

見どころは背の高い中央部にある階段教室で、迫力ある段の勾配や天井高、採光などが理論的な裏付けに基づいて設計されています。設計者の山口半六と久留正道は、文部省の技師として多くの建物を手がけ、久留が著した「学校建築図説明及設計大要」はその後の学校建築の基礎を築きました。ところで、明治村創設の功労者である谷



第四高等学校武術道場「無声堂」。左奥に茅葺きの的が見える

口吉郎と土川元夫は第四高等学校の同窓生で、この建物と「無声堂」の移築にとても熱心だったそうです。

第四高等学校武術道場「無声堂」

4丁目にある第四高等学校武術道場「無声堂」は、背後に迫る森と相まって、秘境の修行場のような雰囲気があります。



広々とした「無声堂」の内部空間。手前側が柔道場で奥側が剣道場

静まり返った道場に足を踏み入れると、予想以上に大きな空間に圧倒されます。道場が広いのは洋小屋が用いられているからです。また柔道場の床下にスプリングを入れるなどの工夫が施されている点も興味深いです。そして、奥の弓道場にある茅葺きの的は、森の風景とつながって見え、この武道場を一層神秘的に感じさせてくれます。



それ以外の洋風建築 2 病院



日本赤十字社中央病院病棟の病室。廊下の光が美しい

日本赤十字社中央病院病棟

日本赤十字社中央病院は、明治政府がジュネーブ条約に加盟した折に、皇室からの寄付で建設されました。設計は宮内庁の技師で赤坂離宮を設計した片山東熊が手がけています。移築された建物は中庭を取り囲んで配置された8棟の病棟の一つで、棟に3つ立ち上がる換気塔や、軒先の飾り、ハーフティンバー

を模した外壁などが印象的な姿を見せて います。病院建築は換気に配慮して設計されて いるのも特徴です。

この建物の見どころは南側の廊下です。前面がガラス窓で構成された廊下には光が降り注ぎ、とても明るい空間になっています。実は この廊下は本来北を向いていて、今の姿は移築 の際に反転させてできた偶然の産物なのです。



名古屋衛戍病院

名古屋衛戍病院のシンプルな外観

日本赤十字社中央病院のすぐ近くには、名古屋衛戍病院の病棟と管理棟があります。かつて名古屋城に置かれた陸軍の名古屋鎮台に属する病院で、隣接する歩兵第六聯隊兵舎も同じく名古屋鎮台の建物です。

こちらの病棟は瓦が葺かれた装飾の無いすつきりした建物で、漆喰塗りの大壁に開けられた上げ下げ窓が唯一の洋風のデザインであります。病室をベランダがぐるりと囲む姿も、どこか和風建築の感じが漂います。

吹き放ちの空間とケレン味のないデザインは衛生的で明るく、ほぼ同じ配置だった日本赤十字社中央病院とは異なる趣きをたたえています。



名古屋衛戍病院のベランダの大壁と洋風の窓



photo: Akihiko Mizuno/Hitoshi Kumamoto / Hisao Takeuchi

日本赤十字社中央病院病棟の南側廊下。移築の際にガラス窓側が南に向いたことで、明るい光が降り注ぐ

医療の発展と病院

一般の人々にとって、もっとも身近に感じられた明治の変革は、医療の発展だったのかかもしれません。そもそも江戸時代には病院という言葉がありませんでした。

それが変わるきっかけとなったのは、戊辰戦争で負傷兵たちの治療にあつた外国人医師たちで、彼らは西洋医学を広め、病院を設立して、医療の発展に貢献しました。

明治時代、多くの人々が病気やケガから救われたことは、きっと何よりも新しい社会の恩恵として感じられたことでしょう。



日本赤十字社中央病院病棟の外観。棟の換気塔に注目



それ以外の洋風建築③ 監獄



前橋監獄雑居房



前橋監獄雑居房の内部の眺め。差し込む光が美しい

前橋監獄の雑居房は、江戸時代の牢獄とい
ギリス式の監獄の形式が混ざった、面白い建物
です。約10cm角の角材が房を鳥籠のよう包围
する形式は江戸時代の牢獄の姿で、越屋根がの
る切妻屋根の小屋組はクイーンポストトラス
風の洋小屋となっています。

格子が並ぶシンプルな外観は現代建築的な
美しさをたたえ、また越屋根から漏れる光が
小屋組を浮かび上がらせる姿は、神秘的な気
配すら感じさせます。

金沢監獄中央看守所・監房

一方の金沢監獄の看守所と監房は、前橋監
獄雑居房と比べると洋風化が進み、設備も構



金沢監獄中央看守所・監房の外観。見張り櫓に注目

金沢監獄正門

最後に、金沢監獄正門をご紹介しますよ
う。レンガの壁と石のストライプが目をひく
ネオ・ルネサンス様式の門は、看守所や監房
とともに「監獄建築家」の異名をとる山下啓

次郎が手がけました。名古屋にある名古屋
市市政資料館（旧名古屋高等裁判所）も山
下によるもので、こちらも厳格さと華やか
さのある美しい建築となっています。

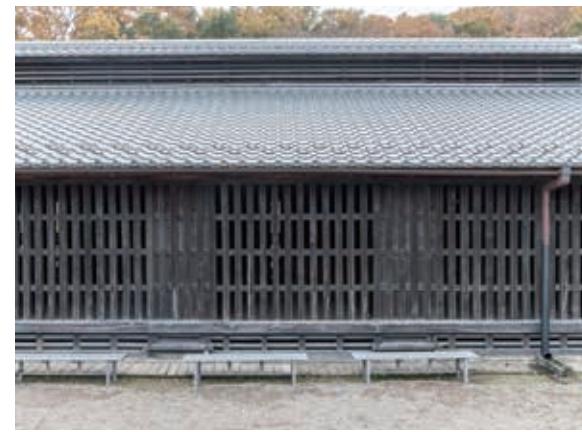


photo:Hitoshi Kumamoto/Akihiko Mizuno

ネオ・ルネサンス様式の巧みな構成が美しい金沢監獄正門。同じ様式の名古屋市市政資料館も併せて見たい



金沢監獄中央看守所の内観。柱がなく監房全体を見渡せる



現代建築を思わせる前橋監獄雑居房の外観。棟の上にのるのが越屋根

法の整備と司法省の建築

憲法の策定や法令の施行は、近代国家を
目指す明治政府にとって最重要の事案でした。
それらをつかさどる司法省の建築は、一
般の人々はほぼ触れる機会はありませんで
したが、威厳と風格、時に恐ろしさを備えた
併まいから、国の根幹をなす重要な施設と
して考えられたことがよく分かります。

それ以外の洋風建築 4 灯台



菅島燈台附属官舎

品川燈台

入鹿池へ突き出た3丁目の岬に佇む品川燈台は、現存する日本最古の洋式燈台です。元は品川沖の人工島にあつたため、小ぶりな姿をしています。設計に携わったフランスの建築技手フロランは、長崎や兵庫の造船所のドック建設にも参加しています。

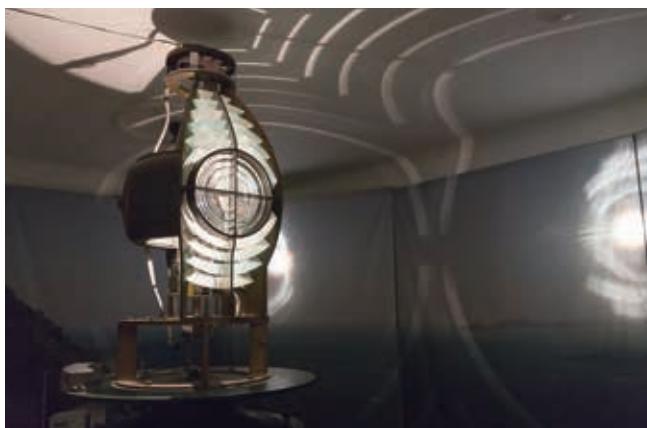
品川燈台の特徴は、なんといつもかわいいかたちです。小さなドアのすぐ上に灯室とレンズが見えるディフォルメされたような姿は、まるで絵本の中の灯台そのものです。

そんな愛らしい灯台ですが、その灯りは18 km先まで届いたといい、昭和32年まで東京湾を行き来する船を見守っていました。

菅島燈台附属官舎のベランダの眺め



菅島燈台附属官舎の外観。レンガとベランダのシンプルな構成



迫力あるレンズの動態展示。壁面を巡る灯りも妖しくて良い

館内では灯台の歴史が常設展示されていて、中でも神島灯台で使用されていた回転レンズの動態展示が見どころです。暗室に入ると、ゴウンゴウンと音を立ててレンズが回り出す姿は、怪奇映画のワンシーンのような不思議な迫力があります。



photo:Hitoshi Kumamoto/Hisao Takeuchi/Akihiko Mizuno
品川燈台と菅島燈台附属官舎を入鹿池側から臨む。ちなみに灯台が白く塗られたのは明治17年以降のことだという



ディフォルメされたような外観がかわいい

しばしば、洋式燈台は文明開化の象徴といわれます。沿岸の要所に燈台が置かれ、安全に航海ができるようになり、発展した港町が新しい文化の発信地になったからでしょう。幕末から明治初頭にかけて燈台を建設したのは外国人の技術者たちで、器材の調達から設置後の管理運営に至るまで、彼らによつて行われました。中でも菅島燈台を手がけたイギリス人土木技師のブラントンは、30基以上の燈台を建設し、横浜の居留地拡張計画や日本大通りなど日本のまちづくりにも関与した重要な人物でした。

文明開化の燈台

特別寄稿 明治村を支える人々

1

中野裕子さん(博物館明治村学芸員)



西郷従道邸の1階の室内再現。見学者は、展示されているほとんどの椅子に腰かけることができる

学芸員として建物に関する資料調査をもとに、展示や収蔵資料を活用したイベントやワークショップの企画・運営、そのほか収蔵資料の維持管理、来村者へのガイドなど普及活動も行う。

収蔵資料について

博物館明治村(以下、明治村と略す)には、建物と乗り物以外はないと思われているのではないでしょうか。

明治村の設立趣意書には、「(前略)明治時代の各種の歴史資料を収集管理して博物館を設置し、広く一般に公開するとともに、(中略)現代及び将来の国民大衆に歴史の指針を与えて、文化の向上に寄与することを目的とする」とあり、それに則り、建物や関連資料だけでなく、重要文化財3件を含む産業機械・



中野裕子さん

文学・音楽・家具など幅広い分野の資料を収蔵し、その数は3万点を優に超えています。

展示方法の転換

開村当時の明治村は、基本的には見学者は建物を外から、たとえ室内に入ることができますたとしても廊下から部屋を眺めるだけでした。2代目の閑野克館長の時には、建物一つ一つがミニ博物館。明治村はミニ博物館の集合体であると、建物の中に展示室を設けることを推し進めました。

明治村の展示に転換されたのは、バブル崩壊後、入村者数が激減していた頃です。「建物の良さを体感してもらうことが大切なではないか、洋館ならば椅子に腰かけて、和館ならば畳に座って空間を味わってもらいたい。そして、人の気配が感じられる展示を。」と3代目の村松貞次郎館長が展示方法の転換を打ち出されたのです。

とは言つても、予算はありませんでしたから、受入以来手つかずになっていた家具資料を選び、修理し展示しました。この時の展示方法を、私たちは「室内再現」と呼んでいます。この室内再現を契機に、収蔵している家具資料の調査に着手し、宮内庁書陵部で

1909年に竣工した「東宮御所(現迎賓館赤坂離宮)」に関する文書資料の調査を行い、

東宮御所創建時の家具の多くが明治村にあることが判明しました。

現在、そして未来

明治村にある建物は建築的に価値があるだけでなく、日本の近代化のあゆみを知ること



クラウドファンディングにより修理されたリードオルガンのコンサートの様子